

東大文学部露文科小史 — 「年報 RUSISTIKA」 発刊に寄せて

川 端 香 男 里

文学部露文科は正式にはロシア語ロシア文学専修課程と言い、昭和46年度（1971）に設置された。ちょうど今年で10年目に当る。国語国文、中文は明治10年（1877）、言語学が明治19年、英文、独文が明治20年、仏文が明治23年の開設であったから、それとくらべてみれば、いかに東大においてロシア学の研究・教育が遅れていたかということは明らかである。ただここで付記しておかなければならないのは、西洋古典学の設置が露文と同年、つまり東大創設以来約100年後のことであったということであって、西洋文学語学研究の根幹をなすべき両学科がこのような処遇を受けていたことを今日改めて思い返すべきであろう。

露文科の設置は一朝にして成ったわけではなく、文学部の数多くの先生方の努力の積み重ねの賜物であった。昭和38年、文学部の課程編制が今日の「類制度」に改められ、語学文学が第三類としてまとめられるに伴ない、まず西洋近代語近代文学専修課程、西洋古典学専修課程が設置され、その翌年「講座外Ⅰ」として露文の課程が作られた。（ただこの三課程はいずれも「講座」の裏付けなしに、いわば「奉仕」の形で出発しており、講座がついたのは、昭和45年度である。西洋近代語近代文学には今日に至るも依然として講座はついていない。）

昭和39年度は、教養学部におられた木村彰一教授が文学部に併任という形で発足し、昭和40年度以降46年度までロシア語ロシア文化履修課程という名前で文学部各類共通講義という形で存続した。その間、言語学の服部四郎教授、社会心理学の辻村明助教授（当時）、外部から井桁貞敏、中村融、和久利誓一、岩間徹、佐々木彰の各先生の御助力を仰いだ。昭和46年度は露文科設置の年であるが、それは制度上のことで授業そのものはまだ「ロシア語ロシア文化履修課程」のままであって、駒場から佐藤純一氏と川端、外部から千野榮一、石山正三、藤沼貴の各先生という形で、すべて「外人部隊」であった。

昭和47年木村彰一教授が文学部に移られ、この年から今日見る「ロシア語ロシア文学専修課程」の授業が始まった。翌年、教養学部から川端が移り、一講座の定員がみたされた。草創期のさまざまな困難も、いわば百年の悲願がようやく達せられた嬉しさでいっぱいのわれわれにとっては、問題ではなかった。昭和49年には、国立大学としては唯一つの博士課程を含む大学院専門課程が設置された。昭和49年度をもって木村彰一教授が創設者としての輝やかなしい業績を後に残して御退官になった。木村教授は、露文科主任としての期間は短かったが、八杉貞利、井桁貞敏両先生によって代表される。東大言語学科のロシア学の伝統を引き継ぎ、われわれに残してくださった。木村教授が学生のために執筆されたガイダンス要項は今日でもそのままの形で残っているが、それを以下に引用しておこう。

ロシア語ロシア文学専修課程

ロシア語・ロシア文学専修課程は、創設以来日が浅く、講座数は現在一つしかない（教授1、助教授1、助手1、ほかに非常勤講師4）、図書の数も乏しく、学生数も初年度（昭和47年度）は6名であった。そんなわけで、研究の面でも教育の面でも、長い伝統を持つ他の専修課程と同じように充実したものとなるためには、少なくとも今後数年を要するだろう。しかしその反面、そうした創設期の学生諸君にとっては、勉学上に多少の困難はあるにせよ、教官とともに専修課程をそだててゆき、よかれあしかれその性格の決定にも影響を与えるという、いわばパイオニア的なよろこびはあるだろうと思う。

この専修課程の講義や演習のカバーする領域は、19世紀から20世紀の初頭にかけてのロシア文学

(小説および詩), いわゆるキエフ時代古代ロシア文学, 古代教会スラヴ語 (これはロシア語にかぎらずすべてのスラヴ語の歴史的研究にとって欠くことのできぬ言語である), 19世紀初頭以後 (広い意味での) 現代ロシア文語, などである。講義や演習を選ぶにあたってとくに学生諸君に要望したいのは, おもな興味の対象が文学にあると語学にあるとを問わず, 語学の演習なり特殊講義なりによってロシア語のトレーニング (とくに読む力のそれ) につとめてもらいたいということである。文学の研究は学生としてではなくても可能かもしれないが, 文献を正確に読む力は学校におけるトレーニングなしには身につけることがきわめて困難だからである。

学生諸君は, われわれ日本人としてロシア語やロシア文学を勉強するのだというはっきりした自覚を持つことが望ましい。つまりロシア文学を勉強するのは窮極において日本文学になんらかの意味で好ましい刺激を与えるためであり, またロシア語を勉強するのは窮極において日本語による思考や表現力を豊かにするためである, という心構えである。ある意味では当然すぎるほど当然なことであるが, こうした明確な目的意識がないために途中で挫折する諸君が間間見受けられるので念のために言うのである。

また, 木村教授在任期の講義題目も, すでに歴史の領域に入ったものであるから, 参考のため掲げておく。

47年度

教 官 名	講義別	講 義 題 目	毎週時間	単位
木 村 教 授	概 説	ロシア文学概説	2	2
	特殊講義	古代教会スラヴ語	2	4
	演 習	ロシア文学演習	2	4
千 野 講 師	概 論	ロシア語学概論	2	4
(教養学部) 北垣教授	特殊講義	ツルゲーネフ研究	2	4
(教養学部) 川端助教授	特殊講義	20世紀ロシア文学序説	2	4
石 山 講 師	演 習	ロシア文学講読	2	4
藤 沼 講 師	演 習	ロシア語と日本語の表現に関する比較	2	4

48年度

教官名	講義別	講義題目	毎週時間	単位
木村教授	特殊講義	『イーゴリ軍記』	2	4
	演習	19世紀ロシア詩	2	4
川端助教授	概説	ロシア文学概説	2	2
	特殊講義	ドストエフスキイと現代	2	4
	演習	20世紀ロシア小説	2	4
(教養学部)北垣教授	特殊講義	ツルゲーネフの作品	2	4
(教養学部)佐藤助教授	演習	ロシア語形態論	2	4
千野講師	概論	ロシア語学概論	2	4
中村講師	演習	ロシア文学講読	2	4

49年度

教官名	講義別	講義題目	毎週時間	単位
木村教授	特殊講義	『イーゴリ軍記』	2	4
	演習	オストロフスキイ『雷雨』	2	4
川端助教授	概説	ロシア文学概説	2	2
	特殊講義	チュッチェフの詩	2	4
	演習	20世紀ロシア小説(ベールイ『銀の鳩』)	2	4
新谷講師	特殊講義	ドストエフスキイの作品	2	4
藤沼講師	演習	ロシア語学演習	2	4
千野講師	概論	ロシア語学概論	2	4
中村講師	演習	ロシア文学講読	2	4

露文科卒業生の数は49年2名、50年3名、51年5名、52年2名、53年5名であるが、同じ時期の言語学(3, 3, 1, 2, 2)中文(1, 2, 2, 5, 1)西洋古典学(0, 2, 1, 4, 5)とくらべて決して少ない数ではない。大学経営を鉄道経営と同じように論ずることの好きな人がいて、国立大文学部は税金の無駄づかいだから、文学部は私立にまかせろと主張している。学問を採算性だけで論ずるこのような議論にまともに対応する必要はあるまい。東大文学部の存在価値を最もよく示しているのが、学部の上にある大学院であって、今上にあげた学科は(露文を含めて)いずれも学部学生よりはるかに多い大学院生を有し、事実この部分からこそ将来日本の学界を背負うべき人材が輩出し、現在も育っているのである。

昭和50年度からは、木村教授の後に教養学部より栗原成郎助教授を迎え、以後二人のスタッフで語

学と文学のバランスをよく取った木村教授の学風をつぐ教育を行うよう心がけ、今日にまで至っている。大学院は教養学部の豊富なロシア語ロシア文学ロシア史関係のスタッフの強力な御助力を得ている。

またわずか一講座の教師で運営せねばならぬ困難な状況を献身的に援助して下さった講師の先生方の名も逸することはできない。前記の各先生以外に、新谷敬三郎、中村喜和、新田実、安井亮平、池田健太郎、桑野隆の諸先生がおられる。東大教養学部を退職された後、大学院も含む授業（チェーフについて）で学生の信望も篤かった池田先生の急逝はわれわれにとって、最も悲しい出来事であった。

三代にわたった助手、田中継根（東北大）、諫早勇一（信州大）、長谷見一雄（山形大）の諸君の功績は、学生諸君の良き相談相手として、研究室の裏方として他にかけがえのないものであった。東大露文科の友愛と信頼にみちた雰囲気は、これら諸君の努力の賜物と言ってよい。

露文科発10年の区切りとして「年報」を発刊することになったが、ごく自然に果実が熟するような形でこの計画は進んだ。教官、学部、大学院在学生、卒業生の業績の発表機関として、親睦の場として、情報交換の手段として育てて行きたいと思っている。

（後記）東京大学全体の「ロシア学」の展望を考える場合、東大大学院比較文学比較文化課程と教養学部教養学科ロシア分科の果たした役割を忘れることはできない。前者は池田健太郎、中村健之介、小平武、北岡誠司、田中継根、安藤厚等を送り出し、後者は多くのより若い世代の研究者たちを育て、それが今日の露文科の基礎になっている。